

老舎「『微神』と『月牙兒』」の「悲劇」について

著者	渡辺 武秀
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	6/7
ページ	79-93
発行年	2002-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/48971

老舎『微神』と『月牙児』の「悲劇」について

渡辺 武秀

はじめに

老舎(一八九九～一九六六)は長篇小説『老張的哲学』(一九二六)で文壇にデビューしている。この作品の大きな特徴は、老舎がこの作品で「笑い」を使った創作を試みているということにあらう。これに続く『趙子曰』(一九二七)、『二馬』(一九二九)なども同じ傾向を持つものであるといえる。このため、これらは後に「ユーモア」作品と呼ばれることになる。(注1)ところが、これらの「ユーモア」作品は、良く観察してみると、「笑い」は散りばめてあるが、ストーリーそのものは「悲劇」になっているのである。(注2)さらに、老舎は、ある時期から、もはや全く「笑い」を含まない、従来とは些か傾向の違う「悲劇」作品をも書き始める。その「ある時期」が短篇小説『微神』(一九三四)創作の時期あたりのように思われる。(注3)そして、この「笑い」の消えた「悲劇」作品の流れが、後の中篇小説『月牙児』(一九三五)、そしてさらには、彼の代表作といわれる長篇小説『駱駝祥子』(一九三六)へと続いて行くように見えるのである。

そこで、この「笑い」のない作品傾向を見極めるために、『微神』と『月牙児』を取り上げ、この二つの作品を比較してみることにした。『微神』と『月牙児』といえ、すぐに挙げられる幾つかの共通点がある。例えば、一人称で書かれている。主人公が女性である。その主人公の女性が売春婦になる。結末で、女性が自殺をしたり、獄につながれたり、極めて悲惨な状況に陥る等といった部分である。このため、しばしばこれらの作品については、そのさまざまな共通点から、作品の関係が指摘されたりすることがある。(注4)

以前、筆者はこの二つの作品についてはすでに些か分析を試みたことがある。(注5)これらの小論の成果に基づき、今回、改めて二つの作品の関係を「悲劇」という視点から考えてみたいと思う。(注6)

さらに、もう少し具体的に述べれば、これらの作品の、それぞれのストーリーの流れは

悲惨な結末へと次第に展開して行くのであるが、その展開の重要なところで、「何か」が決定的に作用して、登場人物は悲惨な境遇へと転落して行くことになる。今回は、この際の「何か」が登場人物の転落にどのように作用しているのかといったことを見極め、その特徴を抽出し、それを比較することを考えている。そして最終的に、この二つの作品の展開はどのような点が同じで、どのような点が異なっているのか、それをどう考えればいいのかといったことを論じてみたい。

一 『微神』の「悲劇」

この『微神』は一人称で描かれており、登場人物は主に「私」という男性と、恋人である「彼女」の二人ということになる。

この作品は極めて幻想的であり、且つ、死んだ人間をまた作品の中に登場させるという虚構性も備えている。簡単にストーリーを紹介しておこう。この作品のストーリーは五つに分けることができると思われる。(注7)

(第一段)：時期は清明節の頃、ある山腹の辺りの風景描写から始まる。小動物たちの動き、周りの情景、青い空、太陽の光といったものが点描される。そしてその場に、「私」はごろりと横になる。やがて、薄目を開け青空の輝きを入れながら、寝るでもなく醒めるでもない「夢の前方」といわれる部分に入っていく。

(第二段)：ここでは「夢の前方」の描写が行われる。ここは不規則な三角形で構成されており、この一角に家がある。これまで「私」は「夢の前方」までは来たことがあったが、その家に一度も入ったことはなかった。今回は決心して部屋の中に入っていくことになる。この部屋の中の様子が描かれたあと、「私」と「彼女」の「愛」の物語が始まる。

(第三段)：「私」と「彼女」の「愛」の物語の最初に置かれているのが、「私」が十七歳の頃のエピソードである。それから年齢、場所を変えて二人の心の交流が描き出されている。だが、二人は結ばれないまま、やがて「私」は南洋（シンガポール）へに行くことになる。「私」が南洋から帰ると、「彼女」は売春婦になってしまっていた。だが「私」はそのことにかまわず「彼女」に結婚を申し込む。このことに対し「彼女」は狂ったように笑うだけだった。それにもめげず再度「彼女」に会いに行くが、その時「彼女」はすでに小さな棺桶の中だった。墮胎の失敗で死んだということだった。

(第四段)：死んだ「彼女」が「私」の前に現れ、「彼女」の口から、死に至った物語が話される。「私」が南洋に行ったあと二回結婚した。最初は「私」に良く似た人だった。二回目は

父親がアヘンに手を出したためにお金が必要になり、お金のために金持ちの坊ちゃんと結婚した。どちらも駄目になった。だがお金は要る。「彼女」は売春を始める。「私」が帰ってきたのは、売春をし何度も堕胎をし、身も心も衰えた時期だった。「彼女」は「私」が必ず自分に会いに来ることを予期していた。「彼女」は、このままでは「私」の心の中にも住めなくなると思い、自分で自分の命を絶ったことを告白する。「彼女」の死は、実は自殺だったのである。

(第五段)：最後はエピローグである。「私」はまた現実に戻ってくる。向こうの見える葬式の行列が描かれた後、物語は終わる

この中で、作品の中心になっているのは第三段と第四段である。この二つの段で、最も興味を引かれるのは、「彼女」が売春婦になり、そしてさらには自殺をしなければならぬ局面に追い込まれるのであるが、その原因の一つに「私」と「彼女」との「愛」というものが絡んでいて考えられる、部分である。つまり、この作品のストーリーの展開は「彼女」は「私」を愛していたが故に売春婦にならざるを得なくなり、さらには自殺をすることになってしまうということになるのではないか。そして、この点こそが、この作品に不思議な深さを与えているように思われるのである。以下、このような部分を詳述する。

【第三段の「悲劇」の展開】

取り上げるのは、第三段の冒頭に位置する、「私」が十七歳の時のエピソードである。「私」が「彼女」の家に行くと、その日はたまたま「彼女」の両親が居なかった。

彼女のお父さんお母さんが家にいる時、彼女はただ窓越しに私をちょっと見るだけだったし、或いは口実を見つけて私が彼女の処へ行った際には、私にちょっと笑いかけるだけだった。今回は、彼女は子猫が面白い遊び道具に出会ったみたいだった。私はこれまで彼女がこれほど活発にすることが「できる」なんて知らなかった。一緒に部屋の仲間で歩いて行く時、彼女の肩が私の肩に触れた。私たちは両方とも十七歳になったばかりだった。二人とも何も言わなかった。でも四つの目がそれぞれ私たちが千万ほど嬉しいということを告げていた。……(略)……心の中に尋ねたいことは沢山あった。ただ、口が何かの力で封をされていた。私は彼女もそうだと気が分かっていて。というのは彼女の白い喉がずーっと小刻みに震えているのが見えていたからだ。まるで関係のない言葉を飲み込もうとし、話すに値するものもまた言うのは恥ずかしいというふうだった。(注8)

二人は十七歳とはいえ、言葉を越えた深いところでお互いを理解し合っている。たとえ言葉を発しなくとも、自分も愛しているし、相手からも愛されているということがわかるのである。だが、この喜びが大きければ大きいほど、この喜びを打ち壊すものに対する

恐怖もまた大きくなる。二人の幸福な時間を打ち破るような誰かが来はしないだろうかの不安が襲う。

時々、彼女はチラッと窓の外を見た。おおかた誰かが入ってこないか恐れているのだろう。誰も人がいないことをしっかり見て取ると、彼女の顔に映った花影は喜びで紅く染まった。彼女の両手はかわるがわる小さな背もたれのない椅子の端を撫でていた。はっきりと耐え難さを表していた。それは喜びの耐え難さだった。ついに、彼は深々と私の目を見、絶対に言いたくないのだが、言わざるを得ないというふうにして「帰りなさい!」と言った。(注9)

「彼女」は「走吧! (帰りなさい)」という言葉が発する。それにしてもこの言葉に込められている「彼女」の気持ちは非常に複雑である。

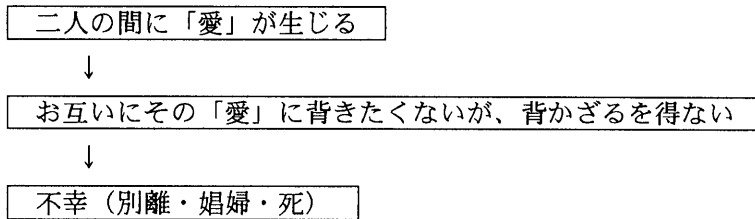
この場合の「走吧!」という言葉が、「私」がここにいるのが迷惑で、「私」に早く帰って欲しいから発せられたものでないことは言うまでもない。そうではなく「彼女」が「私」を「愛している」からこそ口から出てきた言葉である。「彼女」は「私」を深く愛しており、寧ろ本当は両親が不在の時にやってきた「私」を歓迎しているし、「私」を帰したくない気持もある。だが、「彼女」は誰もいない処に二人でいるのを、他の人に見られてしまったら「私」が困ったことになるのではないかと心配し、それから引き起こされる最悪の事態を恐れているのである。こうした気持ちの中で発せられた言葉なのである。

しかし、たとえ言葉が発する気持ちは「愛」に基づくものであったとしても、「走吧!」という言葉は実際には二人を引き離す方向へと作用してしまう。相手のことを愛していればいるほど、相手のことを思いやり、さらに、思いやればやるほど「走吧!」と言わざるを得ない。だが、そう言うってしまうことで、結果的には二人は「結ばれない」方向へと進んでいくことになる。この二人の本当の気持ちと実際に生み出される結果とが、まるで正反対になってしまうのである。この「第三段」にはこの種の「悲劇」が存在している。

このような「悲劇」が起こるのは、「私」や「彼女」が生きている時代、所属しているに社会に「愛している」からこそ、つまり愛情の表現として「彼女」に「走吧!」と言わせてしまう何かが存在し、また「私」が「彼女」を「愛している」からこそ、その「走吧!」を聞き、心の中では去りたくはないのだが、去らざるを得ないと決心してしまう何かがあるからである。

この「第三段」の「私」と「彼女」のエピソードは他にもあるが、この段での「悲劇」の展開の仕方は、基本的な部分では、他のエピソードも、ここで取り上げたエピソードの場合の繰り返しと捉えて良いと思われる。したがって、この段の「悲劇」の展開の分析はこれで充分と考える。最後に、他の「悲劇」と比較するために、この第三段の「悲劇」を最

大限に抽象化して、図示すれば以下になるだろう。



【第四段の「悲劇」の展開】

この第四段は、第三段では死んだはずの「彼女」が「私」の目の前に現れ「私」が南洋に行っていた間に起こった出来事を「私」に話し始める、という設定になっている。

「私」が中国から出ていって後、最初、「彼女」は私に似た男性と結婚する。しかし、この結婚は、その青年が、「彼女」がその青年を愛していず、依然として「私」の方を愛していると知ったことにより破局を迎える。ちょうどこのようなとき、父親が財産を全部無くしてしまい、さらにアヘンにまで手を出してしまうということが起こる。だから、お金を工面するために自分の身を売るような形で裕福な家の御曹子と結婚することになるのである。

彼はとっても焼き餅を焼きました。いつも私にくっついていました。何をするにしてもです。どこに行くにも、彼はいつも後に付いてきました。彼は私の破綻を探し出すことは出来ませんでした。私が彼を愛していないということには気づきました。段々と嫌い、それから面前で私を罵るようになってき、甚だしきに到っては私を殴るようになりました。彼は強引に、私が心の中に別の人がいるという事を認めない訳にはいかないふうになりました。我慢しても我慢しきれず、ご飯の問題も顧みることは出来ませんでした。彼は一枚の着物もあたえず、私を追い出しました。(注10)

金持ちの御曹子とのエピソードはこれだけである。この場合、確かに金のために結婚したのであり、「愛」とは関係ないように見えるが、実は金持ちの御曹子との結婚にも「愛」が絡んでいると考える。

まず、引用文の「彼は私の破綻を探し出すことは出来ませんでした。私が彼を愛していないということには気づきました」にまず注目したい。ここで「破綻」と言っているのは、「彼女」が他の男性と密会とか、交際をしている証拠のことであり、金持ちの御曹子はそのようなことを疑い、その現場を見つけ出そうとしているのである。だが証拠は見つからなかった。

ではどうして「私が彼を愛してない」ということに金持ちの御曹司は気づくことになったのか。

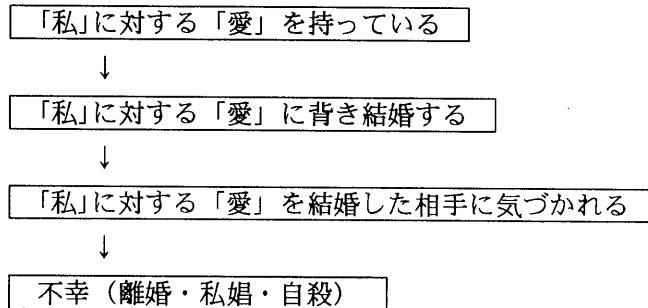
確かに、もともと「彼女」はその金持ちの御曹子を愛してはいないが、彼と一緒に暮らすためには、彼を愛していると彼に思わせるようにし続けなければいけないのである。そうしなければ一緒に暮らすことはできない。だから「彼女」は一所懸命に愛しているふりをしようとした。しかし、どうしてもそれができないのである。それができないのは、単に彼を愛していないからではなく、寧ろ「私」を愛しているからであると考えられる。つまり、もし「私」を愛してさえいなければ、彼を愛していなくとも、愛しているふりをすることはできたのに、「私」を愛していたがために、それができなかったのである、と捉えるべきであろう。作者が描いている、ここにおける「愛」の作用はこのようなと思われる。これをもっと具体的に言うと以下のようなになるだろう。

「彼女」は相手の男性と一緒に暮らしていこうと思っている。否、生活がかかっているものであり、絶対に愛しているふりをしなければならないのである。しかし、それがどうしてもできない。それができないのは、「私」に対する「愛」が、「彼女」の、愛しているふりをしようとする意志を邪魔するからである。さらに言えば、「彼女」が一緒に暮らそうとしている相手の前に、すでに「彼女」の自らの意志ではコントロールできない「愛」が顔をのぞかせるからである。或いはそれが無意識のうちに「彼女」の顔の表情や身振りに出てくると考えても良いだろう。これに相手の男性が気づくのである。こうなれば当然ながら相手の男性は「彼女」を問いつめる。そこで「彼女」はこらえきれず、その事実を認めてしまう。この結果、相手は「一枚の着物もくれず」に「彼女」を「追い出」すのである。

もしも「彼女」が「私」に対する「愛」を完全に捨てることができさえすれば、或いは「私」に対する「愛」そのものがなければ、金持ちの御曹子の世話を受けられたらうし、そうならば少なくとも金のためにあくせくすることだけからは免れたかもしれない。しかし、それができなかったのである。

この場合、金持ちの御曹子と「結婚生活」を続けられれば、それで幸せであるという立場に立つなら、まさにそれを「愛」が阻んだという関係になっているといえる。この場合の「愛」は負担であり、重荷であるばかりか、邪魔なのである。けれども、その「愛」は消えてくれないし、自らの意志でコントロールもできない。だとすれば、結局「彼女」は「私」以外の、どの男性とも永遠に結婚できないことになるのではないか。まして社会には女性が金を稼げる条件も整っていないのである。ここに、「彼女」が私娼に落ちて行かざるを得ない理由がある。

この「第四段」の「悲劇」の展開を図示すれば以下のようなになるだろう。



微妙に、第三段と第四段では異なっている。第三段では「愛」しているが故に「愛」に背かざるを得ない状況があり、結局「愛」に背いたから不幸になっているという形になっている。結局「背きたくなかったが背いた」のである。第四段では、「彼女」は「私」を「愛」してはいるが、諸般の事情から「愛」に背く必要があり「愛」に背こうとしたが、背けなかったので不幸になったのである。つまり「背きたかったが背けなかった」のである。だが、第三段、第四段は、結果的には「背いた」のか「背けなかった」のかという裏と表のような関係にあるにしろ、両方とも「愛に背く」というテーマで描かれていることでは一致しているのである。

二 『月牙児』の「悲劇」について

この作品も一人称で書かれており、主な登場人物は「私」という女性とその母親である。ただ『微神』では「私」が作者を連想させる男性であったが、この『月牙児』は「私」が女性である。同じ一人称ではあるが、この点では異なっている。

この作品は母子二代にわたって、娼婦にならざるを得なかったという悲惨な物語である。物語は内容から大きく次の三つの部分に分けることができると思われる。

（第一段）：母親の物語 （第二段）：「私」の物語 （第三段）：母親と「私」の物語

それぞれの物語のあらすじを簡単に紹介すれば以下のようなになる。

（第一段）：物語は「私」の父親の死の場面から始まる。その時、「私」は七歳だった。そして、葬儀。その後、親子二人で生活していくために「私」は質屋に通わされる。が、質に

入れる物もなくなり、やがて母親は人に洗濯をしてやることで生計を立てようとする。この仕事は過酷で、手がひどく荒れ、激しく汚れた靴下の臭いで、仕事の後に食事が取れずしだいに痩せていく。そのうちに新しいお父さんがやってくる。そのお父さんは「私」が「お父さん」と呼ぶこともしないのに、とても優しくしてくれ、さらに私を学校までも通わせてくれる。こうして数年、幸せな生活が営まれる。だが、私が小学校を卒業するその年、突然父親がいなくなる。また質屋へも通うことになる、また、母親は以前のように洗濯で生計を立てていくことになると思っていたのだが、不思議なことに相変わらず、綺麗に着飾っている。実は母親は驚いたことに売春でお金を稼ぎ始めたのである。私は母親のそんなお金の稼ぎ方を恥じ、憎む。しかし、この仕事にも限界がある。「もうすぐ老いてしまう。あと二年もしたら、ただであげようとしても貰ってくれる人はなくなる。」(注 11) 母親は饅頭(マントウ)屋の主人に嫁いでいった。

(第二段):「私」は小学校の校長先生の取り計らいで、学校で寝場所、食事を与えられ生活することになる。さらに卒業してからも小遣いさん夫婦と一緒にその小学校に住み続ける。この生活は校長の配置転換によって終止符が打たれる。自分で仕事を探す、自分にあった仕事は見つからなかった。困って、校長のところに相談に行く。ところが校長は不在で、校長とは血縁である一人の青年が応対してくれた。この青年はとても優しく、やがて、彼と結ばれることになる。彼の庇護の下での生活が始まった。しかし、この生活も一人の女性の出現によって終わる。その女性はその青年の妻だったのだ。「私」は彼の下を去る。その後、いろいろ働き口を探し、やっとのことで、ある飲食店で働くことになる。ここではホステスとして働くことを要求される。だがどうしても「色」で客を惑わすことができず、辞めることになる。以後は男性と適当に付き合ったり、遊んだり日を送る。そして、やがて売春をすることで生活し始める。

(第三段):だが、この商売で身体の調子はおかしくなり、病気にも罹る。こんな時に、母親を捜し、やがて再会する。その母親もすっかり変わってしまい、お金の亡者になっていた。最後に私娼ということで警察に捕らえられ、更生施設に入れられるが、反抗し、獄に繋がれるという場面で終わる。

第一段の「母親の物語」は母親の「悲劇」を描いたものであり、作品構成からいえば『私』の物語の伏線になっていると考えていいだろう。したがって、「悲劇」の展開という点からは次の『私』の物語を考えれば充分と思われる。

【『私』の物語」の「悲劇」の展開】

この作品の売り物は、何といっても母親が売春をして生活し、それを非難し軽蔑したはずの娘の「私」も、結局、それをせざるを得ないという衝撃的な筋立てである。その中で

も特に読者が手に汗握るのは、「私」が私娼に墜ちて行く過程であろう。この部分が『「私」の物語』である。ここにも幾つかのエピソードがある。その中の幾つかを見ていきたい。

① 〈優しい青年との出会いと別れ〉

世話になった校長の親族の優しい青年の魅力に引かれ、やがて結ばれる。彼の庇護による生活が始まった。彼は、食べるためのお金、何枚かの洋服を「私」に与える。もちろん「私」はこんな生活を望んでいるわけではない。しかし、彼に頼んで仕事を探してもらってはいるがどうしても見つからないのである。

だが、このような生活も一人の女性の出現によって終止符が打たれることになる。この部分を少し詳しく見てみる。

私はとっくに知っていた。私には希望がないということ。わずかの雲でも三日月を遮ることができる。果たして、長くしないうちに、春は夏に変わり、私の春の夢は終わりを迎えた。ある日、ちょうど正午になったばかりの頃、一人の若い婦人がやってきた。彼女はとても美しかった。でも精巧な美しさではなかった。磁器人形のようなだった。彼女は部屋に入ってくるなり泣き始めた。問うまでもなく、私はすでに分かっていた。彼女の様子では、彼女は「私」と喧嘩をする気持ちはないし、私はもっと彼女と衝突するつもりはなかった。彼女は正直な人だった。彼女は泣き、だが私の手を取り「彼は私たち二人を騙しているのよ!」と言った。私は彼女も「愛人」であるだけだと考えていた。そうではなかった。彼女は彼の妻だったのだ。彼女は私を責めず、ただ何度となく「彼を放してくださいませんか!」と言うだけだった。私はどうして良いか分からなかったが、この婦人がかわいそうになった。私は承知した。彼女は笑った。彼女のこの様子を見て、私は心の目がかけていると思った。彼女はまるで何も理解していないみたいで、ただ彼女の夫が必要だということを知っているだけだった。(注12)

そして、次の日、「私」は青年には何も告げず、何も持たず、部屋を出て行くことになる。

ここに登場する、青年の妻という女性も決して悪い人物ではない。だから、普通であれば、この種の男女問題による二人の女性の出会いは、往々にして激しい罵り合いや喧嘩になるのだが、この二人の場合、それも起こらない。確かにどちらも良い人物である。だが、「私」の方は、職業もなく、お金もない、そんな不安定な生活環境に居て、しかもこの部屋を出ていけば明日はどうなるか分からないといった状況の中で、却ってその女性が「かわいそう」と逆に同情し、自分の方から身を引いたのである。この点で、「私」の、女性に対する思いやり、優しさの方が勝っていると考えられる。このような他人に対する思いや

り、優しさといったものを「好ましさ」という言葉で表すならば、この「私」の「好ましさ」は、先の見通しも立たないかで行われているということで、限りなく純粋なものであるといえるのではないか。

だが、皮肉なことに、この「好ましさ」のために「私」は青年を失ってしまったばかりか、更に困難な状況に向かって足を踏み出さなければならなくなかったのである。

② 〈やっと見つけた飲食店での仕事を辞めてしまう〉

その青年のもとを去った後、いろいろ働き口を探す容易には見つからない。やがて、ある飲食店で店員を募集していることを知る。それに応募して面接試験を受け、たくさんの応募者の中から「私」が選ばれる。(注 13)

やっと入った、その飲食店での仕事は「女招待(給仕)」をすることだった。この飲食店にはもう一人給仕がいる。その女性が「第一号」給仕で、「私」が「第二号」だった。この「第一号」の服装や仕事ぶりは以下のようなものである。これによって、「私」に期待されている仕事内容がわかる。

不思議だ!「第一号」の袖はとっても高く巻き上げられていた。袖の白い裏生地は一点の汚れもなかった。腕には白絹のハンカチが置かれており、そのハンカチには「妹の私は貴方が好き」と刺繍されていた。彼女は朝から晩まで顔に白粉をたたき、唇には血の瓢箪のように口紅を塗っていた。客に煙草の火をつけてやる時、彼女の膝はお客の足に寄りかかり、そうしてお酌をした。ある時には、彼女自身も飲んだ。お客に対し、ある時は、彼女は非常に周到に仕えた。ある時には、見向きもしなかった。顔を下げ、見えない振りをすることがあった。(注 14)

「私」は、このようではなく、肉体的には辛いだろうけれど、普通の従業員のようになりたいのである。だが、店主は許さない「ここで長く働こうと思うなら、『第1号』のやるようにやれ」(注 15)と警告する。もちろん「私」は「第一号」がそのようにやる事情も分かっているし、決して「第一号」を軽蔑しているわけではない。でも、「私」にはそれができないのである。

「第一号」のように、どうしてもやろうとしない「私」を見て、店主は最後通牒を発する。数日の猶予を与え、もしそれをやらなければクビにすると迫る。にもかかわらず、店主や「第一号」にどのように言われても、最後まで「私」は「第一号」のようにやることを拒み、結局自分から辞めることにする。

しかし、辞めるということは、「私」にとって、たちどころに食べるもの住むところが無くなるということなのである。次の日からそのための方法を考えなければならないのである。だから簡単なことではない。それでも「第1号」のようにやりたくないとして、

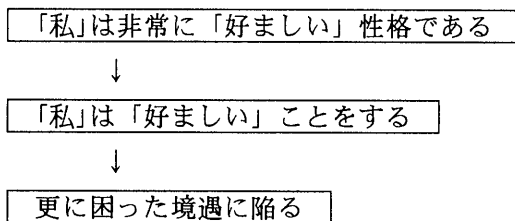
寧ろ辞める道の方を選び取ったのである。生存のギリギリのところで女性のプライドとも言えるようなものを守り通したのである。このような態度も「好ましい」という範疇に入れとも良いと思われる。

だがしかし、その「私」の「好ましき」の発揮は必ずしも「私」に幸せをもたらさない。そればかりか、それによって却って「私」は悲惨な状況に陥れられることになっているのである。つまり、ここでの「悲劇」の展開は、「私」が「女性として恥ずかしい行為をすることを拒否した」ことで、「私」は「女性として恥ずかしい行為をしなければならない状況に追い込まれて行く」というものなのである。このことは、作品中の以下の文章からも読みとれるのではないか。

最後の黒い影が私の方に向かって一步近づいた。それを避けようとして、さらにそれに歩み寄った。私はその仕事を捨てたことを後悔はしなかった。だが、私はその影も本当に怖かった。(注 16)

このようにして、しだいしだいに、「私」が、母親がするのを見て、最も恥じ、激しく憎んでいたはずの売春という商売を始めることになるのである。

したがって、この『私』の物語の「悲劇」の展開を抽象化すれば以下のようなになるだろう。



この展開からすれば、つまり、「私」の「好ましき」、具体的には「思いやり」「優しさ」「気骨ある態度」というものであり、これらは、結局「私」のためにはならないばかりか、却って困ったことになってしまうということでもある。こうなってしまうのは、言うまでもなく、社会のどこかに、「私」のような人間が「好ましき」を発揮すれば、困った境遇へと墜ちて行くことになってしまう、何かが存在しているからなのである。

三 まとめ

今回の分析の結果、まず、『微神』と『月牙児』の「悲劇」で重要な役割を果たしているのが、『微神』では「愛」であり、『月牙児』では「好ましい」性格である、と言ってもよいと思われる。

では老舎はどうしてこのようなものを用いて作品を創作したのか。

そもそも「愛」とか「好ましい」性格というのは、ほとんど「誰でも正しいとし、誰でも味方をする」ものに属するものである。これは、例えば『微神』では「私」と「彼女」との「愛」の交流を読み、二人の「愛」の成就を思わず願ってしまうものであり、『月牙児』では青年の妻の「別れて下さい」の言葉を「私」が即受け入れる態度を読み、「なんて優しい人なのだ」と感動させられるものなのである。こういうものはとりえず「絶対的善」とでも言ってもよさそうなものであろう。つまり、老舎はこのような「絶対的善」のようなものを持つ人物を、社会に放り込んで社会や人間を眺めたとき、そこに人間や社会の何が見えるのかという方法で、作品を創作しているのだと考えることができるのではないか。この創作の仕方が、『微神』と『月牙児』とに共通しているのである。

そして、「悲劇」の展開は、『微神』では「愛しているからこそ不幸に落ちて行かざるを得ない」となっているし、『月牙児』では「好ましい性格であったが故に不幸に墜ちて行く」となっていて、これが数度繰り返されている。この「愛」や「好ましい性格」が「絶対的な善」のようなものであるから、もし社会や人間が正常ならば「愛しているから二人は結ばれる」「好ましいことをすれば必ず良いことが起こる」という因果関係が存在するはずである。だから、逆にもしこの関係が成立していないならば、それは、社会や人間のどこかが間違っていたり、どこかに問題となるべきものが存在しているからである、ということになるのではないか。このような理屈が、この作品の根底にあるように思われる。ここに老舎が何のために作品を描いているのかという理由を垣間見ることができる。

ただ「絶対的善」のようなものと一括はしたが、厳密には『微神』の「愛」と『月牙児』の「好ましき」とは異なるところもある。「愛」の場合は、「愛」そのものが持っている不可思議な部分があり、「愛」を取り扱えばどうしてもその点に触れてしまうことになる。その分、いくらか観念的、抽象的な内容にならざるを得ない。このような部分が一度死んだ「彼女」を蘇らせ、その人物に別の角度から「愛」を語らせるという設定にも関係しているであろう。しかし一方「好ましき」という言葉で表されるものは、優しさ、善良さ、正直さ、正義感などといったものであり、その「好ましき」そのものには不可思議なもの

が入り込む余地は少ない。この点で『月牙児』の「悲劇」の屈折の度合いは小さくなっており、『微神』より奥深さは薄れるが、リアルな印象が濃く出ているように思われる。

さらに注目したいのは、作品の「悲劇」の主人公として扱われる人物が、社会階層から言えば、低いところに位置し、しかも弱くて貧しい人々にしだいに移ってきていると思われる部分である。『微神』の「彼女」はもともとしかるべき家のお嬢さんであり、小学校の教員の資格も持っている人物であるのに較べると『月牙児』の「私」は最初の父親は病気でなくし、二度目の父親は失跡してしまい、母親が私娼をすることでかろうじて生活を維持しているような家庭の娘である。つまり『月牙児』の「私」は『微神』の「彼女」に比べて、社会的にはもっと低い階層の女性であるということが言える。これは、老舎が社会の中でも低い階層に属する人物を小説の主人公として取り上げ始めたという、一つの変化の証になるだろう。

今回の考察で、『微神』と『月牙児』の「悲劇」については幾らかははっきりしてきたような気がしている。だが、もちろん老舎の「悲劇」がどのようなものであるか解明するには、もっと多くの作品を考える必要があるだろう。今後の課題としたい。(完)

注

テキストは『老舎全集 8』（人民文学出版社・一九九九年）に収められている『微神』と『月牙児』を使った。従ってここに記載するテキストの頁は『全集』のものである。

なお、各作品の最初の掲載雑誌、その雑誌が発行された年月日は以下の通りである。

『微神』（文学 一卷四号・一九三三．十．一）『月牙児』（国間周報一二卷一二・一三・一四期、一九三五年四月一日・八日・一五日）

- (1) 老舎作品の「幽默」評価の歴史については、拙稿「各種の老舎論——「ユーモア」評価をめぐって——」（『集刊東洋学』六〇号・一九八八年・一二六～一三三頁）で論じたことがある。老舎の「ユーモア」に対する評価は割れる。「ユーモア」に深い意味を見出そうとする研究者もいれば、悪ふざけというふうに見る人々もいる。さらに、時代状況も考える必要があるし、国民性の問題もあるだろう。ともあれ、基本的には他人の評価を鵜呑みにしてはいけないように思う。
- (2) 拙論「老舎『幽默小説』の『悲劇』考」（『中国文人の思考と表現』・汲古書院）で

「ユーモア」作品の「悲劇」について論じた。「笑い」と物語の「悲劇」がどのように関係しているのかを見極め、これが老舍作品の、一つの核になっていることを示した。

- (3) 拙論「老舍『微神』試論」(『八戸工業大学紀要』第一九卷)参照。いつ、このような傾向を持つ作品が出現したのかについては、断定することはできない。『微神』の他にも、『大悲寺外』(文芸月刊四巻一号・一九三三. 七. 一)『歪毛児』(文芸月刊四巻四号・一九三三. 十. 一)『柳家大院』(大衆画報第一期・一九三三. 十一)といった作品も、この傾向のものであると思う。この点については今後の課題である。
- (4) 『微神』と『月牙児』について、共通点である「売春婦」に視点をあてた次のような指摘もある。『月牙児』は『微神』の延長線上に並ぶ作品、強いて言えば『微神』の欠を補って、老舍の愛したひとりの女性の不幸を、同じような売春婦になった多くの女性たちの不幸というレベルまで拡大して、もう一度追求しなおした作品とも言えるのではないだろうか。」(『老舍事典』(大修館書店)一二八頁)また、注(7)の伊藤氏の論文にも『微神』と『月牙児』の関係について論じている部分がある。
- (5) 『微神』については拙論「老舍『微神』試論」(『八戸工業大学紀要』第一八巻)を、『月牙児』については拙論「老舍『月牙児』試論」(『八戸工業大学紀要』第二〇巻)を参照。これらの論文で、それぞれの作品についてはすでに述べた。
- (6) ここでいう「悲劇」は文学の一形式としての悲劇ではなく、悲惨な結末を迎えるという意味の程度の「悲劇」であり、この意味だということでカッコ付きになっている。
- (7) 伊藤敬一「《微神》与老舍の文学」東京大学教養学部外国語学科紀要(昭六二年三月二三日)。この論文は中国語で書かれている。伊藤氏は、この物語を内容から以下の五つの部分に分けている。

1) 第一段:「春の花園」 2) 第二段:「夢の前方」 3) 第三段:「『私』の回想」

4) 第四段:「『彼女』の陳述と訴え」 5) 第五段:「プロローグ」

ただ、作品分析法は伊藤氏の場合と異なる。氏は特に恋愛の物語を、老舍の実体験としてこの作品を読み解こうとしている。

- (8) 『微神』五六頁。
- (9) 同上
- (10) 『微神』六一頁
- (11) 『月牙児』二六八頁
- (12) 『月牙児』二七四～二七五頁

- (13) 竹中伸氏は本作品を「三日月」と題して翻訳されている。(『老舍小説全集 6 巻』三九頁・学研) この場面の注に「当時北京には工場などはあまりなく、デパートの店員やレストランの給仕も全部男であり、女の職場は今のようになかった。本文二八頁に出ている女給の場末の飲食店は例外中の例外である。」とある。
- (14) 『月牙兒』二七六頁
- (15) 『月牙兒』二七七頁
- (16) 同上

(付記) 本稿は科学研究費補助金(基盤研究(C))「中国における家族の文学表象の形成と展開に関する基礎的研究」代表者西上勝)による研究成果の一部である。